

第3回「『論語』の名句（一）」

「辞は達するのみ」（衛霊公第十五）

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第3回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

今回は『論語』の名句という題で、二回にわたってお話しします。

『論語』には五百ほどのことばがあります。

その中でも、名句として、世の中に広く知られていることばがたくさんあります。

そこで、『論語』をはじめから読むというよりも、良く知られたことば、優れたことば、そういうものを読んでいくのが、よろしいかと思えます。

そのほうが親しくなっていくますし、名句は全体を引き締める短い句であることが多いので、そういうものを選ばれるといいでしょう。

もちろん、現在は名句を抜き出した本がたくさんありますが、ご自分で抜き出されたらいいかと思えます。そこで、例として抜き出しました。

「辞は達じ たつするのみ」「子曰、辞達而已矣」（衛霊公第十五）

短いことばですけれども、これは『論語』の名句であるのみならず、中国人のものの考え方全体をもつかんでいる重要なことばです。まず、意味をお伝えしましょう。

「辞」は文章、文。単語という意味も含めてもいいでしょう。

「達するのみ」と言えば、達意たついの文章というものがあります。短いことばで簡潔に、そして意を尽くしているものを達意の文章といいます。

「達意」

「栄達えいたつ」

「到達とうたつ」

「達」は、すべてそこに到着しているということですが、大体において、良いことの方が多い。

「栄達」は大変な出世をしたということです。

つまり「達意」あるいは「辞は達じ たつするのみ」とは、大切なことは簡潔にして的確に言え、と

ということです。長々と言うものではないというのがこのことばの意味です。

実は我々日本人が使うことばは、この「長々」のほうです。中国人の評価する言語と、我々の言語とはずいぶん違います。

例えば、この文はどうですか？

「そのように思われるだろうという感じが、どこかに幾分残っていそうなふうに思う気持ちがかなりありますが、必ずしもそうでないように見えます、ぼんやりと」

こんなことばを聞いても、何を言っているか、わけがわかりません。

しかし、日本人は大体こういう言い方をするほうを好みます。

ずばっと「だめ」とか「よろしい」と言うのでは、なんだか物足りない。これが日本人です。

これは、私が中国について勉強してきた中で、いつも感じたことです。

台湾留学中、先生に添削をしてもらいました。

まずは文章。いつも出てくる批評が「冗長である」。「長い。もっと短いことばで表現しなさい」と。直していただいた文章を見て、本当によくわかりました。

「達意」ですね。ごたごた言わずに、短いことばで言っています。

【中国人のことば・考え方】

中国人はなぜ短いことばで言えるかという、それは語彙ごいが豊富だからです。そこにぴったりとしたことばを選んで書けます。

そして中国人の持っている言語的センスというものがあります。

それが「辞は達するのみ」ということばで表現されていると思います。

ですから、このことばは『論語』の中でも優れたことばですが、それだけにとどまらず、中国人の言語全体の性格を表していると思います。

ことばは考え方、感じ方を表しますから、中国人の考え方、感覚につながっているのです。

さて、「辞は違するのみ」。このことばを学んだ後、みなさんをお願いしたいことがあります。

それは漢字です。

漢字には様々な意味合いがあります。漢字の源を勉強するのも大事ですが、その後に、いろいろな形で使われてきた意味合いを理解することが重要と思います。

【漢字への理解】

そこで、時間があるとき、漢字について、どういう意味があるかを確認されるといいでしょう。

一例を上げましょう。

^{ろう}
「労」

これは、我々は「労働」などに使います。しかし、この「労」にはずいぶんいろいろな意味が含まれています。その熟語を並べました。

^{きんろう}
「勤労」働く。「労」の意味を表しています。他の漢字をつけてわかりやすくしています。
「勤」も働くという意味です。

^{くろう}
「苦労」骨折る。「苦」という意味を「労」が持っているので「苦労」。

^{しんろう}
「心労」精神的な「労」。「労」に悩むという意味がありますので「心労」。

^{ひろう}
「疲労」働けば肉体もくたくたになる。「労」には疲れるという意味も出てきますので「疲労」。

^{こうろう}
「功劳」働いて良い功績となる。「労」に手柄という意味も出る。

^{いろろう}
「慰労」「労」には慰めるという意味合い「^{ねぎら}労う」もありますので「慰労」。

これらの熟語、「労」自体は一貫して使われていますが、意味は全部違います。

このように様々な形で「労」という字が使われて、意味が展開していることをご記憶ください。

中国の漢字を見るとき、どういう意味合いをおさえるためには、適当な辞書なり、意味を説明しているもので調べる必要があります。少しずつでもいいから蓄積していただきたい。それが漢字について知識を深めていくことになります。

『論語』を読むと同時に、漢字について理解を深めていただきたいというのが私の気持ちです。

「辞は達するのみ」ことばというものは重要なことだけ言えばいい、ということですが、もう少し拡大して説明します。

^{めいじつ}
「名実」ということばがあります。

「名」は名、「実」は中身。抽象的に言いますと、「目」は形状・形式、「実」は内容です。

「名実」が一致することが一番いい。形式と内容とが一致すれば最高です。

ところが、なかなか「名実」が一致しない。どちらかと言えば「名」に力が流れていく、あるいは「実」が中心ということになります。そこで、様々な問題が起こります。しかし理想は一致することです。

この「名実」一致を目指して、ことばを使っているわけですが、やはり一つの傾向、流れがあります。

それを、大きくは中国の言語と日本の言語とで見ると、どちらかと言うと、中国の言語は「実」が中心です。日本語は「名」のほうに力点が置かれている傾向があります。

例えば「山」「川」。

^{さんせん}
「山川」の自然を見るときに、中国人は実際の「山」「川」へのイメージが強く、楽しむならば実際の山川を訪れるという発想です。ですから山に登ったり、川を眺めに行くという詩、文章がたくさんあります。

我々はどうか。日本人は実際に「山川」を訪れなくても、形式化して、頭の中で「山川」を思うという形で自然を作りあげることができます。「枯山水」は岩や石を山に、石や砂を川の流れに見立てて、楽しむことができます。これは日本人特有のことです。自然を様式化して、その形を表現するというわけです。実際に現地に行かなくても、庭で大自然をイメージすることができる。これが日本人ですね。

日本の庭は独特です。ほとんどの中国人は、見てもわかりません。大自然が小さな庭に表現されている。われわれは形式を重んじるというところがあるからです。

たくさんの方が茶道を習っています。茶道では茶の儀式を学びます。形式を重んじる感覚があるのです。中国人との大きな違いです。それを表現したのが、「辞は達するのみ」です。

短い句ですが、学びを広げていくと、中国人の考え方、日本人の考え方にまでつながっているということです。

一句をいろいろな意味での比較というところまで、広げていかれたらいいと思います。

今回は『論語』の名句 第一回をお話ししました。